4. モラエスの「風土」（２）～ハーンの轍を踏みながら～

宮崎　隆義

1

ラフカディオ・ハーン（Patrick Lafcadio Hearn, 1850-1904）は，アメリカで開かれた博覧会で日本に興味を抱き，やがて日本を訪れることとなった[1]。以降，大学の教師，特に東京帝国大学のお雇い外国人教師として英文学を講じ，後年に著名となる弟子を多く輩出している。ハーンの講義を受けた学生のひとりが哲学者の和辻哲郎（1889-1960）であり，和辻がその著『風土』（1935）において，ハーンの土地の捉え方に親和性を示していることは興味深い[2]。和辻哲郎は，「風土」というものについて次のように述べている。

> ここに風土と呼ぶのはある土地の気候，気象，地質，地味，地形，景観などの総称である。それは古くは水土とも言われている。人間の環境としての自然を地水火風として把捉した古代の自然観がこれらの概念の背後にひそんでいるのであろう[3]。

和辻は，「風土」を人間存在のひとつの規定として説くために，「個であるとともに全であるごとき人間存在の根本構造」として，「空間性・時間性」を提唱する。土地をただ表面的に空間として捉えるだけでなく，歴史を内在した土地として「時間性」を意識し捉えることが和辻の「風土」についての考え方の本質であって，ハーンが日本の昔話や怪談に関心を持ち，「採話」と「再話」によって土地を立体的複合的に表そうとした点に，和辻との親和性が伺えるのであるが，モラエスについてもその傾向が伺えるのである[4]。

ハーンとは直接の接点がなかったモラエス(Wenceslau José de Sousa Moraes, 1854-1929)であるが，ハーンを尊敬，敬愛していたことは知られていて，その捉え方もハーンと似通っており，土地を「風土」として包括的に捉えていることは興味深い。しかしながら，ハーンを尊敬し，その著作を範として仰ぎながらもモラエスの土地と人の捉え方には，ハーンとの差異が見られる。モラエスの土地に対する捉え方には，ハーンとは違ったモラエスの

---

[1] 1884 年 12 月，アメリカのニューオリンズで開かれた万国産業綿花百年博覧会の日本館で服部一三と出会い日本に対する興味を抱き，やがて来日しジャーナリストから教師生活を送り，後に日本の紹介だけでなく日本の昔話の採話・再話を行なった。

[2] 原田照史は，和辻とハーンとの発想の親近性に触れて，和辻美学の先駆者たちとしてハーンをそのひとりに置いている。原田によれば，ハーンの「やさしさ」（tenderness）が和辻にあっては人と人との「間柄」，人間的な「いつくしみ」であると見なしている。Cf. 原田照史「和辻美学の先駆者達—ハーン，ニーチェ，ワーグナー—」『和辻哲郎全集　月報８』，pp.4-8.

[3] 和辻哲郎『和辻哲郎全集　第八巻』（岩波書店，1989 年），p. 7.

[4] 拙論「モラエスの「風土」～ハーンとの親和性～」『平成 29 年度総合科学部創生研究プロジェクト経費・地域創生総合科学推進報告書—異文化に照らし出された四国～外国語文献の調査・研究から～』（徳島：教育出版センター，2018 年 3 月）参照。

生来の傾向も相俟っている点を見逃すこともできない。そもそも土地を，あるいは風景を「風土」として捉えるには，捉えようとする人物の立場や視点というものが関わっている。あるいはその人物の全人格的なものも関わるであろう。和辻が『風土』において，空間だけでなく時間も含めたことは評価できるが，土地を捉え，「風土」を理解するにはモラエスが実践した庶民の生活も伴うべきであろう。

ハーンを尊敬し，ハーンをお手本として書かれたモラエスの作品，特に『徳島の盆踊り』（*O "Bon-odori„ em Tokushima*, 1916）や『おヨネとコハル』(*Ó-Yoné e Ko-Haru*, 1923)が，容易には日本語化されないポルトガル語で書かれていることは，モラエスの母語がポルトガル語であるという当然のことを差し置いても留意すべきだろう。英語が簡単に日本語化される，もしくは日本において英語で書かれていても多くの理解者を持つハーンの著作と比べると，モラエスとハーンのふたりの日本の土地に対するまなざしの違いというものが自然と浮かび上がって来ると思われる。

2

モラエスは，1913 年 7 月に徳島に来住したのち，結局故国に帰ることもなく徳島で生涯を終えている。徳島にやってきた理由については，いくつか考えられるにしても，神戸で知りあった徳島出身のおヨネとの縁が，徳島に来住することの大きな要因となったことは否めないだろう。

モラエスは，徳島にやってきて，伊賀町の四軒長屋に居を構え『徳島の盆踊り』の執筆に専念する。『徳島の盆踊り』執筆以前には，神戸で領事，後には総領事としての仕事に励みながら，1902 年 4 月から，ポルトガルのポルトで刊行されていた『ポルト商報』(*Comércio do Porto*)の通信員として日本についての記事を『日本通信』(*Cartas do Japão*, 1902 - 1913)として書き送っていた[5]。通信員として祖国ポルトガルとつないでいた関係は，その後の出版との関わりを考えれば，実はモラエスが亡くなるまで続いていたのである。

モラエスは，徳島に隠棲し孤独のうちに生涯を終えたとの印象が持たれている。だが，それは徳島での生活の仕方，つまり四軒長屋に住み，西洋人がほとんどいない徳島で暮らしたということが，モラエスに関わりのある人々の間でそのように言われてしまったためであろう。実際モラエスがやってきた頃の徳島には，モラエスを含めて西洋人は 4，5 人しかいなかったというし[6]，その西洋人たちとの接触すらもモラエスは極力避けていたようである。その上に，日本語があまり上手でなかったろうとの捉え方があって，言葉がほとんど通じない世界で 60 歳を過ぎたモラエスが，不自由な生活をしていたとみなされているのである。

だが，日本に 30 年近く暮らしただけでなく，領事，総領事という極めて高度な政治的外

---

[5] 岡村多希子「増補『おヨネとコハル』の新しい読み方について」『おヨネとコハル』（東京：彩流社，2004 年），p. 237.

[6] モラエス著，岡村多希子訳『徳島の盆踊り』（徳島：徳島県立文学書道館，ことのは文庫，2010 年），p. 59.

交的な活動とその実績を考えれば，たとえ表面的にしゃべる日本語がたどたどしくても[7]，文字を介しての情報収集力は極めて優れたものであったに違いない。英語もフランス語も堪能であったことは知られているし，日本国内での領事，総領事の職責を考えれば当然日本語についても能力はひじょうに高かったはずである。そうでなければ領事，総領事としての職務の遂行はとても考えられない。異邦人，「けとーじん」[8]として徳島で扱われたモラエスが，いかにも孤独な年寄りの外国人という印象になっているが，日本語がたどたどしい外国人，特に西洋人に対しては，日本人は何かと憐れみを感じて同情し世話を焼きたがるところがあり，それがむしろモラエスにとっては好都合であったということがひょっとしてあったかもしれない。実際に現代でも，そうした日本人の側面に甘んじている外国人，特に西洋人がいないこともない。モラエスは子供たちから「けとーじん」呼ばわりされたことに悲しさを覚えてはいるものの[9]，西洋人にとって日本は，日本人の西洋崇拝と卑下の傾向を考えればある意味住みやすい面があったろうことは想像できる。

モラエスとハーンとの違いについて，留意しておかなければならないことは，モラエスがその生涯において，ポルトガル海軍軍人からさらに外交官，領事，総領事として立ち回っていたということである。徳島に隠棲したとはいえ，ポルトガル語で書かれたモラエスの書き物は，ポルトガル本国での紙面の第 1 面を飾っていたのである[10]。それは外交官モラエスの目を通しての日本の姿であり，一地方都市である徳島の姿であったに違いない。ハーンはジャーナリストとして『神戸クロニクル』(*The Kobe Chronicle*)にも関わっていたが[11]，ジャーナリストとしての目と，外交官としての目にはどうしても違いはあるだろうし，少なくともモラエスは本国ポルトガルでは一目も二目も置かれていたのである。

ハーンは，日本にやって来た後，やがて大学の教師の立場に身を置くこととなる。当時の大学の教師の身分はかなり高いものであったろうし，世間的にも大学の教師は大きな尊敬の念を持たれて見られていたことであろう。しかも日本政府によるお雇い外国人教師となると，身分的にも俸給の面でも日本人とは格段の違いがあって，庶民感覚から考えれば当時の大臣並み，あるいはそれ以上の待遇と俸給を受けていたようである[12]。そのうえ，大学という高等教育機関であるから，同僚も教え子たちも英語を介してハーンとの意思疎通をおこなっており，モラエスのように，およそ言葉で不自由することはなかったはずである。

---

[7] Cf. 佐藤征弥他「ヴェンセスラウ・デ・モラエスの日本語会話能力—会話能力の検証および会話内容からみえる人物像について—」『徳島大学地域科学研究第 8 巻』（徳島：徳島大学総合科学部，2018 年 12 月）。
[8] 『徳島の盆踊り』，pp. 255-258.
[9] 同上，p. 256.
[10] 特に『ポルト商報』の第 1 面。四国放送が作成した，モラエスを描いたドキュメンタリ『望郷リスボン』（1993 年）を見る機会があったが，その中で岡村多希子氏がポルトで『ポルト商報』の紙面を確認している映像があり，その映像からもモラエスが特別な扱いを受けていたことが伺える。
[11] 1894 年 10 月 6 日から翌 1 月 30 日まで。
[12] Cf. 植村正治「明治前期お雇い外国人の給与」『流通科学大学論集—流通・経営編—第 21 巻第 1 号』（神戸：流通科学大学，2008 年 4 月）。

3

ハーンの「東洋の土を踏んだ日」[13]は，ハーンが初めて松江に足を踏み入れた印象で綴られている。言葉も全くわからない土地にやってきて，俥屋にどこでも構わないから連れて行ってくれと身振り手振りで伝え，訪れた寺での印象とそこで見たものが，繊細な筆致で描かれているが，そのまなざしは，やはり松江の尋常中学校に赴任する教師という立場のまなざしで，慈しみの気持ちが込められてはいるものの，生活者，庶民の生活者の目ではない。ハーンの身長は 160 センチメートルほどで，あの夏目漱石ともほぼ変わらず，当時の日本人の身長とさほど変わらないのであるが[14]，ハーンには，それまでの異国からの旅行者の印象と同じく，土地を，そしてそこに住む人々を「お伽の国」に住む「おとぎの国の人々」の印象として重ね捉えている。

> 日本の土を踏んだ日の印象を語るとなると，みな，申し合わせたように，この国をお伽の国，そこに住む人々をお伽の国の人々と呼ぶ。しかし，もっと正確な表現が不可能に近いことをまず書こうとすると，期せずしてその文句が同じになってしまうのは，自然の理というものである。すべてがわれわれのところよりも，こじんまりと優雅にできている世界，—小柄で，見るもやさしそうな人々が，幸福を祈るがごとく，そろって微笑みかけてくる世界—あらゆる動きがゆったりと穏やかで，声をひそめて語る世界—土地も人も空も，これまでよそで見て知っていたとは似ても似つかぬ世界—そんな世界にいきなり身を置くとき，イギリスの昔話ではぐくまれた想像力の持主なら，昔見た妖精の国の夢がとうとう現実になったと思うのも無理はない。　（14）[15]

ジョナサン・スィフト(Jonathan Swift, 1667-1745)のあの『ガリバー旅行記』(*Gulliver's Travels*, 1735)に登場する，だれもが知っている「小人の国」(‘A Voyage to Lilliput’)は，イギリスという国そのものの風刺でもあるが，あらゆるものが「こじんまりと優雅にできている世界，—小柄で，見るもやさしそうな人々が，幸福を祈るがごとく，そろって微笑みかけてくる世界—」であるこの土地で，そこに住む「小柄な」人々を見る目には，どうしてもスィフトのような風刺的な視線を感じざるを得ない。意識的であれ無意識的であれ，ハーンのまなざしは，ガリバーのような人物の視点，つまりは一段高みに身を置き距離を置いた観察者のまなざしなのである。スィフトもジャーナリストとして活躍したことを考えれば，そのまなざしとハーンのまなざしが似通っていても不思議はない。

ここにある「妖精の国」という言葉で思い起こされるのが，『徳島の盆踊り』にある，ベント・カルケージャによる「序文ではない」序文にある「ニンフ」たちの小島，日本であ

---

[13] 小泉八雲著，平川祐弘編『神々の国の首都』（東京：講談社学術文庫 948，2013 年）。
[14] Cf.「大正時代「文士の身長くらべ」なるもの」（https://blog.goo.ne.jp/luckycolor_2007/e/0442bf87f03c26aa547dc07b2538bc86）
[15] 小泉八雲著，平川祐弘編『神々の国の首都』（東京：講談社学術文庫 948，2013 年）。括弧内の数字は頁数を示す。

る。

> 夢をみているにすぎないのだ！
> 船乗り—しかも，祖国の輝かしい伝統を体現しているポルトガルの船乗りである彼を誘惑したのは海の幻影だったのか，美しい波にのせて日本のその辺境の小島に連れ去ったのは海だったのか？「げいしゃ」の姉妹である日本のニンフたちが，自分たちの秘密を明らかにした彼の才気と不敵さへの復讐として，詩人の魂をもったこのポルトガル男児を誘拐したのだろうか？　（16-17）[16]

モラエスは写真を見てもかなり大柄な人である。背の高いモラエスにとってなら，日本という「お伽の国」で「お伽の国の人々」と関わり，「ニンフ」たちに誘惑されたとしてもそれなりにイメージが合いそうである。「げいしゃ」という言葉に，当時の日本の紹介のされ方—それは今でもあまり変わってはいないようである—をうかがい知ることができるが，「げいしゃ」とその姉妹のニンフたちの秘密を知るということ，それは，うがって考えれば，「げいしゃ」やその姉妹たちの出自や境遇の秘密ということにもつながるだろう。モラエスが，日本で，徳島で，庶民の生活を実践することによって知ることになったのは，そうした華やかで夢幻的な面の裏にある秘密でもある。モラエスが関わったふたりの女性，おヨネとコハル，あるいは一時関係を取り沙汰された永原デンの境遇を考えれば首肯できるのである。異国の人間の目に映る華やかな幻想的で夢幻的な日本の世界のベールが剥がされるとき，庶民の不遇な境遇が，ともすると露わにされるのである。

「お伽の国」の日本にやってきたハーンは，俥屋で人力車を雇い案内をしてもらうが，そうして訪れる寺の見方にはジャーナリストとしての確かなまなざしを伺うことができる。しかしながら，その見方はややもすれば感情を排した冷めた見方であって，車夫に対しても同様である。車夫の境遇を想像しての同情や憐れみの描写には欠けているばかりか，車夫に対して「チャ」と呼びかけ，いささか滑稽なやり取り，「テラ」での坊主とのやり取りと，寺と神社を混同しているかのような描写など，いささかユーモラスでもある。ハーンが，外国人，西洋人としてどの様に見られていたかは「盆踊り」に伺うことができる。

> 田舎の人たちは外人の私に驚異の目を見張る。色々な場所で，私たちが休んでいると，老人がやって来て，私の着ているものに触れようとする。何度も腰をかがめてお辞儀をし，人なつっこい笑みをうかべて，そのどうにも抑え難い好奇の念を詫び，通訳にさまざまなおかしい質問を発するのである。これほどに温和で親切な顔を私はいまだかつて見たことがない。そしてこれらの顔はそのまま彼らの魂を表している。私

[16] モラエス著，岡村多希子訳『徳島の盆踊り』（徳島：徳島文学書道館，2010 年）。括弧内の数字は頁数を示す。

はまだ怒った声を聞いたこともなければ，不親切な行為を目にしたこともない。(80)[17]

ガリバーを囲む小人たちを連想させるような描写でもあるが，おそらくハーンは，土地の人々からは通訳を従えた偉い西洋人と見なされていて，モラエスが「けとーじん」と呼ばれたような不快な思いの経験はなかったであろう。庶民の世界とはかけ離れたところから眺めた日本，島根の風景は，ジャーナリストの目を通した精緻な描写に包まれながらも，客観的な対象物，単なる被写体の感がなくもないのである。

対照的にモラエスが，同情にも似た思いを車夫に寄せて憐れみを感じている点には，モラエスの性向が表れている。次は，『極東素描』(*Traços do Extremo Oriente*, 1895)にある「人力車」についての一節であるが，人力車を曳く車夫へのまなざし，さらにはそうした境遇にある人々やそれ以下の階層の人々に対する憐れみに満ちたモラエス独特の心情が表れている。

> 名は人間であるとはいえ，その苛酷な職業のせいでヨーロッパのあわれな駄馬のようになろうとしているかに思われるそれらの人たちの存在には，どんなに薄情な人であっても，心底痛ましく思う。このヨーロッパ自身，老い，疲弊し，消耗し，日々のわずかなパンのための闘いにますます迫られているものの，それでもなお，そのすさまじい意味における貧困とはどのようなものであるか，思い及ばない。アジアでの，東洋の神秘的世界での，その人口稠密な中心地での貧困を見に来ることが必要だ。華麗な自然と奇妙なコントラストを成すここでは，太陽輝くこれらの国々においては，貧困というこの単語は，あふれかえる人々のうちに，腐敗物から発生する蠕虫にむしろ似ている真の大群衆のうちに，その真の極致を見せる。・・・・・不平を言わない辛抱づよい貧困。引き潮とともに沈み，上げ潮とともに上がる，川に浮遊する死体。水たまりで癒される渇き，ごみためで癒される飢え。微笑みなしの巣穴での婚礼，カエルのように泥の中で腹を引きずる子供たち[18]。

モラエスには，いわゆる社会の底辺に生きる人達への同情というもの，憐れみに満ちた共感というものがある。モラエスが，マカオにおいても水上生活者，蛋民に同情を寄せていたし[19]，日本にやってきて，上掲の引用にあるように人力車の車夫に対して，その境遇に思いを馳せている。おヨネとコハルとの関わりは，実は庶民への思いがあってのことであろうし，ふたりとの関わりでその思いをより強めたに違いあるまい。

4

モラエスは徳島に来る決心をしたが，その決心には「零の免状」，「零の学位」をやっと

---

[17] 「盆踊り」『神々の国の首都』，pp. 76-98.
[18] モラエス著，岡村多希子訳『極東素描』（徳島：モラエス研究会，2018 年），pp. 38-39.
[19] 『極東素描』，pp. 112-121.

得たという，むしろ晴れ晴れとした思いを抱いていたことが伺える。

> そして，そのあとはじめて，やっとのことで，かくも超越的なこの社会的地位—零—の免状，学位を手にすることができた[20]。

ハーンが，ジャーナリストを経て，教師の道へと進み，東京帝国大学のお雇い外国人教師となって栄達を極め，その後もその生活を捨てることなどなかったのに対し，モラエスは，逆にポルトガル総領事となりながらもあっさりとすべてを捨てている。単純に比較はできないが，ポルトガル総領事となると一国の代表でありハーンよりも身分や地位が高いとみなすこともできるだろうし，本国ポルトガルとの公的なつながりというものもある。それに対して，ハーンにはおよそモラエスのような公的なつながりはなかったであろうし，極東の日本を紹介した点では当時高い評価を得ながらも，いわゆる作家としてのハーンの評価は，日本では高いにもかかわらず，欧米では低いとされ，英語圏の文学史にもほとんど登場しないのである。

前述したようにモラエスは孤独であったかのように捉えられているが，実際にはほぼ毎日絵葉書や書簡を家族や親戚，知人たちに書き送っている。そうした絵葉書や書簡が現在も残っており，また，未公表のものがまだ残っているとのことである。多くのものが私人あてのものであるので，公表化は困難であるが[21]，いずれ少しずつ明らかになっていくものと思われる。

モラエスの最大の理解者であったベント・カルケージャは，その「序文ではない」にこう書いている。

> マクベスの夢！・・・闘いののち，精神は奇妙な幻想に圧倒されたように感じる。静かな，ほのぐらい森を通っているような気がする。その森で，炎につつまれた大木のそばに三人のいずれも不可解な女の姿を見かける。彼女たちが何者であるかを知ろうとすればするほど，彼女たちは飛ぶようなはやさで逃げ，「やがて王になられるお方！」と叫びながら，ある壮麗な宮殿に走り込む。「ポルト商報」で「ぼんおどり」の最終部分を読んだ日以来，私たちの心の中にはひょっとしてヴェンセスラウ・デ・モラエスはマクベスの夢を見ているのではあるまいか，という印象が刻まれた。 (16)[22]

カルケージャのモラエスの夢，あるいは幻に対する理解は深いものと言えるだろう。ヨーロッパ人が自分たちの文明化する世界に幻滅し，ヨーロッパを逃れて東洋に楽園を見出

---

[20] 『徳島の盆踊り』，p. 188.

[21] 2015 年 3 月にポルトガルを訪問する機会を得て，リスボンで，元在日本ポルトガル大使であった故アルマンド・マルティンス・ジャネイラ氏の奥様イングリッド夫人にお会いすることができたが，まだ未公表の絵葉書が 100 通ほど手元にあるとのことであった。

[22] 『徳島の盆踊り』。

した時代に，多くのヨーロッパ人は東洋に，あるいは世界の果てに出掛け，やがては幻滅を味わいつつその地で亡くなるか，あるいは再びヨーロッパに舞い戻ってきたという。ハーンは，日本の女性と結婚し日本に帰化し日本に溶け込んだように思われるが，晩年に至って日本には幻滅を感じたといわれている。ピエール・ロティ(Pierre Loti, 1850-1923)も同様に日本には幻滅を感じてヨーロッパに戻った。だが，モラエスがお手本としたそのふたりとは違って，モラエス自身はポルトガルに帰ることもなく，徳島に 16 年間暮らして生を終えたのである。その理由はまた複雑であるが，日本の女性といっしょに暮らしながらも，正式な結婚をすることもなく，日本に帰化することもしなかったモラエスは，日本をハーンやロティのように賛美しながらも，一方で，異邦人として一定の距離を置くことによって日本に対する幻滅を感じてしまうことから逃れていたのかもしれない。モラエスのよき理解者であるアルマンド・マルティンス・ジャネイロは，モラエスについて次のように述べている。

> 彼は日本を最もよく理解し，日本人のように日本を愛した異邦人であった。 しかし作家としてはほとんど何も日本人に与えていない。ポルトガル人たちが昔も今も彼の著書を暖かく迎えている事実が立証するとおり，ポルトガル人の嗜好を判断し，その感受性の渇望に答えて彼が書いたのは，ひとえにポルトガルのためであった。 (206)[23]

ジャネイロの指摘はモラエスの作品の本質を穿っている。庶民の生活を実践し，庶民の生活を知り，日本を最もよく理解したモラエスには，「憐れみ」(piedade)[24]がその心性の根底にあり，それはポルトガル人独特の「サウダーデ」(saudade)の感情の根底にあるものと通じ合っているのであろう。平凡な官僚の家に生まれ，リスボンにあるアパートの 3 階の家で幼少期を過ごし育ったモラエスは，海軍軍人として，士官として，さらに領事，総領事として栄達を極めながらも，それらを捨て去り，異国である日本の四軒長屋に暮らすひとりの西洋乞食のような境遇に身を置いたのは，自身に対する「憐れみ」を日本の貧困にあえぐ庶民に対する「憐れみ」と重ね，それによってポルトガル人独特の心情「サウダーデ」の世界に回帰するためであったのかもしれない。その点では，モラエスは最期までポルトガル人であったと考えることもできるのである[25]。

---

[23] アルマンド・マルティンス・ジャネイロ著，野々山ミナ子・ 平野孝国訳『夜明けのしらべ—モラエス・人と作品』（東京：五月書房，1969 年）。
[24] *Ó-Yoné e Ko-Haru* のエピグラフ，ロティの引用にある‘pitié’に対するモラエスの訳語。
[25] Cf. 深沢暁「サウダーデとポルトガル人」『天理大学学報』，第 65 巻第 1 号，2014 年。

参考文献：

植村正治「明治前期お雇い外国人の給与」『流通科学大学論集—流通・経営編—第 21 巻第 1 号』，流通科学大学，2008 年 4 月.

岡村多希子『モラエスの旅—ポルトガル文人外交官』，彩流社，2000 年.

小泉八雲，平川祐弘編『明治日本の面影』，講談社学術文庫，1990 年.

ジャネイロ，アルマンド・マルチンス著，野々山ミナ子・ 平野孝国訳『夜明けのしらべ—モラエス・人と作品』，五月書房，1969 年.

花野富蔵『定本モラエス全集Ⅰ』，集英社，1969 年.

原田照史「和辻美学の先駆者達—ハーン，ニーチェ，ワーグナー—」『和辻哲郎全集月報８』

深沢暁「サウダーデとポルトガル人」『天理大学学報』，第 65 巻第 1 号，2014 年.

宮崎隆義「モラエスの「風土」～ハーンとの親和性～」『平成 29 年度総合科学部創生研究プロジェクト経費・地域創生総合科学推進報告書—異文化に照らし出された四国～外国語文献の調査・研究から～』，教育出版センター，2018 年 3 月.

モラエス，ヴェンセスラウ・デ著，岡村多希子訳『徳島の盆踊り』，徳島県立文学書道館（ことのは文庫），2010 年.

————『極東素描』，モラエス研究会，2018 年.

和辻哲郎『和辻哲郎全集　第八巻』，岩波書店，1989 年.

Moraes, Wenceslau José de Sousa, *O "Bon-odori„ em Tokushima (Caderno de impressões intimas)* LIVRARIA MAGALHÃES & MONIZ, 1916.

_____, *Ó-Yoné e Ko-Haru*, EDIÇÃO DE A «RENASCENÇA PORTUGUESA», PORTO, 1923.